

土地の人々とジオパークの歴史

ジオパークや付近の地域での考古学的発見からは、3 万年前頃から、十勝平野ではヒトが生活していたことが示されています。この土地は 1,000 年以上にわたってヒトの生活を支えており、豊富な猟場や、釣りができる川や湖、採集ができる森林、そして農業を営むことができる耕作可能な土壌を提供してきました。ただし、北海道では 19 世紀になるまで、農業は行われていませんでした。現在の鹿追の歴史は、北海道により多くの和人が移住してきた 20 世紀初期に始まります。北海道の先住文化の痕跡は、町の名前など、多くのランドマークの名前に残っています。

アイヌ文化

アイヌの人々は、かつて、北海道の湖や川の周辺や、海岸付近のコタンと呼ばれる村に暮らしていました。そしてサケやマスを釣り、陸上では狩猟採集を行っていました。

鹿追の初期の移住者の記録によれば、後に町となるアイヌの村が 10 存在していました。北海道にますます多くの人々が移住し、中央政府により土地の制限や異文化同化政策が導入される中、多くのアイヌのコミュニティは移住し、故郷を捨て去ることを強いられました。アイヌ文化はこのような政策の被害に遭いましたが、北海道各地の数多くの町やランドマークの名前として、その遺産がのこっています。「鹿追（しかおい）」という地名は、「鹿を猟せし所」を意味するアイヌの名前が由来となっています。

入植者と新たな生き方

19 世紀後半、政府は北海道で開発活動を開始し、島の外から人々を移住させ、土地を耕作させました。移住者たちは、農業用に土地を開拓・開発する見返りとして、土地を一区画与えられました。鹿追の最初の移住者たちは 1902 年に移住し、1920 年までには 4,000 人以上が移住していました。移住者たちは土地を耕し、基本的な道具と馬に引かせるすきのみを使って、木を伐採し、土地を開拓していきました。

鹿追の鉄道は、1921 年と 1928 年に開かれました。それから数年間、農業と林業が栄えました。1959 年、鹿追町が設立され、発展は続きました。20 世紀後半になると、現代的な農業機械や新たな技術発展が導入され、農業が発展しました。今日、鹿追には大きな農業産業が存在し、乳製品、牛肉、ソバ、麦、ジャガイモ、ビート、その他多数の野菜や果物など、さまざまな生産品が全国各地のスーパーへ出荷されています。

鹿追の初期の移住者の苦難や環境の厳しさは、7 才のときに両親と共に鹿追に移住した画家・神田日勝（かんだ・につしょう、1937 年－1970 年）の作品に描かれています。鹿追の神田日勝記念美術館には、神田日勝の油絵やスケッチのコレクションが多数展示されています。